



目次

アフリカレポート

No.28 1999

巻頭言 原口武彦 1

— 小 特集 TICAD II —		
第2回アフリカ開発会議を振り返って	国分圭子	2
TICAD IIに期待されたもの	尾関葉子	6

コンゴ危機、何が争われているのか
—ジンバブウェ軍事介入とSADC外交の分裂 吉國恒雄 10

新生ナイジェリアへ苦難の歩み 林 正樹 14

アフリカの選挙再考
—ガボンの大統領選挙をめぐって 武内進一 18

アフリカ女性の婚姻をめぐる統計的諸問題 早瀬保子 22

ココアの次はパイナップル？
—ガーナにおける小農輸出作物生産の新動向 高根 務 26

ウガンダ経済の復興と東アフリカ地域経済 吉田栄一 30

南アフリカの真実和解委員会 永原陽子 34

IDE国際ワークショップ報告
「新たな国際関係のパラダイムを求めて—グローバル化時代の中東・アフリカ・ラテンアメリカ」 牧野久美子 39

調査員レポート

エチオピアから
レザー・ロードの旅／政策篇 児玉由佳 42
—皮流通の担い手を訪ねて

資料紹介 47

カット：シプリアン・トクダクバ作「グンド」
(ベハンザン王のエンブレム, 1996年)
(「アフリカ・アフリカ」展カタログより)

本誌に掲載されている論文などの内容や意見は、外部からの投稿を含め、執筆者個人に属し、日本貿易振興会あるいはアジア経済研究所の公式見解を示すものではありません。

- 会議の生産性とはなんだろう。
- 昨年10月、東京のホテルニューオータニで TICADII が開催され、全アフリカ53カ国中なんと51カ国が政府代表を送ってきた。援助国、国際機関にNGOも加わって、規模としてはまことに大掛かりな国際会議であった。そのために費やされた予算も、投入された労働力も半端ではない。支出以上の“効果”が今後産出されてこなければ、TICADII の費用対効果はプラスに転じない。TICADII を事業としてみれば、そういうことになる。
- 大統領選挙を間近に控えていたナイジェリアで、かのオバサンジョを大統領候補に擁する国民民主党が選挙資金調達のためのパーティーを開いて、一晩で4億^ギ(465万^{ドル}相当)を集めたという。たいへんな“生産性”である。
- 延々と踊り続けた饗宴外交、1814～15年のウィーン会議は、人為の見え透いた危うい反動体制をその成果とした。当時の権力者たちが並々ならぬ精力を費やして積み重ねた合意の数々は、しかし結局のところ歴史の大波を前にして無力な防波堤でしかなかった。合意形成という会議の技術的成功は、必ずしも“効果”を意味しない。

- だが、人が頻繁に集まって頻繁に合意を形成していく営みは、民主制度には欠かせない。そのための費用も時間も、絶対の賢帝を最早期待しないという決意においては、必要悪としての側面を持っている。経済的窮状がすでに明らかであったにも拘わらず、アフリカ諸国は1980年のラゴス会議まで経済首脳会議を持たなかった。たとえ合意に至らなくても、70年代において話し合いは持たれてしかるべきだったろう。現在も経済が順調に推移しているならば、なにも東京に集まって、アフリカの貧困について改めて話し合う必要もない。
- 会議の生産性とは、「いまから思えばあのときの話し合いが、歴史が変わっていく兆候であった」と後に思い起こされる、その一点にしかないのかも知れない。アジア研の研究会は珈琲一杯によって購われているが、参加者にお代分の議論を要求しているわけでは勿論ない。TICADII に問われるのは、その規模に適う歴史性なのではあるまいか。
- 本誌の編集委員は以下の6名である。

平野克己、牧野久美子、丹埜靖子
武内進一、津田みわ、佐藤 章
(平野記)